

英知通信



昭和53年11月30日

英知大学

No.24

新任のごあいさし

英知大学後援会会長 福田健彦



大志を抱け

もう、かれこれ十年以上も前のことであるが、大学の国文学の教授をしている私の親友が、卒業式を詠んだ短歌で、「淋しいとき、チョコレット欲しいとき、先生のところへ来い」と言い給いし師よさらば」という歌が朝日歌壇に入選していたが、教育の権威もおちたものだと思いたのを思い出す。

私がかねて尊敬しているその友人のように、次代の国民の教育の為に全情熱を傾けている人からみれば、卒業式に胸をこみあげてくる感動もなく、少女趣味的回想しかわいてこない師弟関係というものにやりきれないものを感じたのであろう。

それにつけても思い出すのは札幌農学校の校長であったクラーク博士が、学生達に呼びかけた「ボーイズ・ビー・アンビィンヤス」というあの有名な言葉である。

クラーク博士のこの言葉が、どれほど、明治・大正・昭和三代の若者の心を、鼓舞したかは、はかりきれないものがある。

クラーク博士が、はるばるアメリカから札幌農学校に赴任してきたのは、明治九年のことであり、在任は僅か八ヶ月余の短期間であったとい

アメリカ清教徒の流れを汲む博士の教育は厳しく、然し慈愛にみちたものであった。博士の教育は聖書をもって修身の教科書とするキリスト教精神に基づく人間形成にあった。あるとき北海道開拓使庁の役人が煩雑な校則をおしつけようとしたら、博士は規則で人間をつくることはできない。「ビー・ゼンツルマン」で十分だといって、これを拒絶したといわれている。

帰国にあたって騎馬で見送ってくれた学生達と固い握手をかわした後、博士は日頃学生に話してきた言葉、「ボーイズ・ビー・アンビィンヤス」(青年よ大志を抱け)をまた別れの言葉として声高らかに述べたのであった。それは残雪の輝く明治十年の早春の札幌郊外でのことであつた。

滞在一年にも満たない短い期間にすぎなかった博士が、我が国思想界に与えた影響は極めて大きいものがあつた。クラーク博士の薫陶を受けた内村鑑三先生、新渡戸稲造先生等の活躍によつてもその影響の大きさを知らることができよう。

思うに博士の血に流れる不屈不撓のアメリカ開拓者精神と敬虔にして崇高なキリスト教精神が、ひたすら開拓を待つ北海道を「人の世の清き国ぞ」と憧れて集つてきた青年達の魂をゆさぶつたのであろう。私はそこにわれわれの先輩である明治の若人達の、発洩として希望にあふれた胸の鼓動を感じる思いがするのである。

あるローマの哲人は「青年の意気盛んにして国興り、青年の意気衰え

て国亡ぶ」と喝破したが、今を去る千数百年の昔、大陸文化の導入に命がけでとりくんだ飛鳥、白鳳の若者達、近くは西欧文明を貧慾なまでに吸収してやまなかつた明治の青年達の意気は、まさに天をつく気概にあふれていたのである。

そして今日、日本は第二次大戦後の敗戦という困難な諸問題を美事に克服して、世界の経済大国として国際社会に大きな地歩を占めるにいたつた。然しながらまことに残念なことであるが、あまりに急速な経済成長の結果、国民は物質的繁栄に酔いしれ、心の充実を忘却してしまつた感がある。青年はクラーク博士のいう「大志」を失い、レジャーの追求をもつて人生の生き甲斐と感して毎日をあけくれする軽佻浮薄な風潮が瀰漫しているのはまことに憂慮にたえないのである。

幕末のわれわれの若き先輩は、笈を負うて江戸にのぼるにあつて「学若し成らずんば死すとも帰らず」と決意を披瀝したが、われわれは大学に学ぶ意義やクラーク博士の「大志」というものについてよく考へてみる必要がある。

ここでもう一度クラーク博士の言葉にかえろ。そして次に続く言葉をかみしめよう。

「青年よ大志を抱け。それは金銭や我慾のためではない。また人呼んで名声という空しいもののためであってもならない。人と生れて当然身にそなえていなければならぬものを身につけるために大志を抱け」

英知大学の学生諸君!!

洋々たる可能性を秘めた諸君の人生の為に、今こそ確固たる志をたてようではないか。

昭和五十三年度

英知大学後援会

新役員決まる

総会の席上、会長・副会長・監査が選出されたので、会則第七条により会長が常任理事及び理事を委嘱し役員全員が次のように決まる。

(敬称省略)

- | | |
|------|--------|
| 会長 | 福田健彦 |
| 副会長 | 深井久男 |
| 常任理事 | 小林茂 |
| 理事 | 田中義一 |
| 理事 | 牧林茂 |
| 理事 | 田淵正夫 |
| 理事 | 阪本登 |
| 理事 | 永井政之助 |
| 理事 | 井穴寛 |
| 理事 | 道野裕 |
| 理事 | 和田義次 |
| 理事 | 関野忠 |
| 理事 | 桑野昭 |
| 理事 | 松田明 |
| 理事 | 網谷義郎 |
| 理事 | 本田周司 |
| 理事 | 東本保 |
| 理事 | 山本小枝子 |
| 理事 | 山西小枝子 |
| 理事 | 小谷博 |
| 理事 | 谷本孝 |
| 理事 | 中畑孝 |
| 理事 | 野口徹 |
| 常任理事 | 山岸睦雄氏 |
| 同 | 松井良太郎氏 |
| 同 | 梅田啓子氏 |
| 同 | 的場正一氏 |
| 同 | 梅田章氏 |
| 同 | 梅田章氏 |

なおお子様が昭和五十二年度にご卒業になりましたので役員を引かれた方々は次の通りであります。

この方々は本会創立当初より引き続き役員として、本会発展のためにご尽力を賜り、おかげをもちまして、本会が確固たる基礎を築き、今日の発展を遂げましたそのご功績に対し、本会は衷

第四回英知大学

後援会総会を開く

心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻下さいませうお願い申し上げますとともに皆様のご健康をお祈りいたします。(文責石田書記)

- 一、日時 六月三日(土)午後二時半
- 一、場所 英知大学本館三〇一教室

一、出席者 一〇三名
年を追う毎に出席者も次第にふえ、本年は一〇三名という例年にならぬ多数の出席があり、大阪・兵庫・京都・奈良などの近府県からが大部分でありましたが、広島・岐阜・岡山・鳥取の遠方から態々出席される熱心なご父兄もあり、盛会のうち、定刻に次の次第によって始め

1. 開会のことば

田中副会長より、かくも多数の出席を得まして開会出来まことは、大慶に存じます。この上は十分なご協議をお願いいたします。と開会を宣せられる。

2. 会長あいさつ(原文のまま)

本日は、昭和五十三年度の後援会総会を開きましたところ、皆様にはご多用のところをお差繰りご出席いただきまして、厚くお礼申し上げます。

英知大学は本年をもちまして、創立十五周年を迎えましたが、後援会もまた発足後、本年で四年目を迎えることとなります。その間、大学は着実に発展を遂げ、後援会もまた基礎が固まりまして、大学の充実と発展にお役にたちつゝあ

ることは、ご同慶のいたりに存じます。昨年の後援会の総会では、新装なったチャペルと図書館の披露がありました。本年は先生方の研究に欠かせぬ研究棟が完成いたしました。そしてこれらの何れにも、後援会として応分の寄与ができましたことは、皆様方のご後援の賜と感謝いたしております。

ここでご報告申し上げねばなりませんのは、昨年研究棟の定礎式に出席され、その完成を心から待っておられた本学の創立者であり、初代学長であった田口枢機卿が、去る二月二十三日にお亡くなりになったことでもあります。田口学長は、カトリック精神を基にし若い人々の人間形成の場として、本学を創立されました。大学の基礎も固まり、今後、愈々発展を遂げようとするときに、お亡くなりになりました。後援会として謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

さて戦後三十年日本では、平和がつぎ日本の経済は、素晴らしい発展を遂げました。名実ともに経済大国として世界に大きな影響を与えるまでに成長いたしました。最近の報道によると、GNPは一兆ドルに迫ろうとしており、円高等の影響があるにせよ、日本の二

十五倍の国土と二倍の人口を擁するアメリカの半分になろうとしております。これを人口一人当りに換算するとアメリカと同じという事になります。

そういう経済発展の結果、われわれは世界のどの国にも負けず、物質的繁栄を享受しようようになりました。然し、その反面、国民は物質的満足に安住して、精神的な充実さを忘れ、物事の是非善悪の判断より、損得の勘定が先行し、人間の生き方に目標や自信を喪失した風潮が瀰漫していることは、まことに残念であります。然し私共はこういふすべてを経済的価値観で評価しようとする最近の風潮を反省し、正しい人間の生き方、生きる姿勢というものを求めてゆく必要があると思っております。

そしてこういふ姿勢を正してゆく上に最も大切なことは、やはり学校の教育であり、国の政治であり翻って足許をみつめてみると、われわれの家庭における日々の躰であると思えます。

教育の荒廃が叫ばれて久しいのですが、残念ながら今日の大学には人の生きる姿勢を探究し、人の生きる生命の根源を探究してゆく学風は少いように思われるのであります。然しそういう中であって、

英知大学は創立後日なお浅く、まだ世間に広く名を知られておりません。然し立派な先生を擁して、建学の精神に則り、教授と学生が尊敬と信頼の上に、真の人間形成を目標としている立派な学問、教育の府であると、私は信じており

ます。

孟子曰く「山高きが故に尊からず木あるを以て尊しとなす」という言葉がありますが、歴史の古さ、学校の規模、学生の多少が大学の価値を決定するものではありません。それは大学の虚像であります。英知大学の建学の精神と先生方の教育に対する情熱は必ずやこの大学が世間に正しく評価される時がくるものと確信しております。

後援会は、この英知大学の発展にささやかながら寄与したいと考えている次第であります。

3. 理事長あいさつ

安田理事長より、只今福田会長のごあいさつのうちにありましたように、創立者であり、初代学長でありました田口芳五郎枢機卿が、帰天いたしましたその折には、後援会よりご芳情を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

偉大な創立者を失いましたけれども、建学の精神を最もよく知りつくしている岸学長が継いでおりますので、大学にはその精神を精神として、後援会のご協力を得て益々発展していくものと思えます。なお後援会から多額の助成金をいただきありがとうございます。と心より感謝を述べられて、理事長のあいさつを終る。

4. 講演

岸学長先生より「英知大学のめざすも」と題して講演、その要点

をあげてみますと、先ず始めに後援会のご協力援助に対し心から感謝を申され、次いで大学は学問を学び研究する場であり、真理を探究する場であり、大いに勉学に励んでいただきたいと同時に、人間性を養っていくべきであります。と懇切丁寧に話され、なお本年度から始められた二つの新しい試みについて説明される。

その要点は、

- (1) 日時 四月六日より四月九日まで
- (2) 場所 六甲山の上の凌雲荘、大学からホテルまで往復ともバス使用
- (3) プログラム 学長の話、新入生の自己紹介、大学歌の練習・リクレーション・グループディスカッションなど。

右のように実施いたしましたところ、先生が多数参加下さったことや、学生も真剣に取り組み寝食を共にしたこと、同じ理想に燃える若者が先生も交えて共に語り合い英知の家族の一員となったことを身をもって体得したことと思えます。その後先生や学生の感想は、頗る好評で、先生と学生とが親しくなり学生の間でもよい友達ができて毎日大学に行くのが楽しみになりましたことなどが効果を種々あげておりましたが、帰るときに学生の眼の輝きがそれを短的に物語

ついでに、英知大学海外研修旅行の試み

海外研修と同時に諸外国のさまざまな文化にふれる機会を与え

一、議事

会則第十一条に従い、会長が議長となり議事を進める。

1. 昭和五十二年決算報告

議長の指名により石田書記が別紙決算書に基づいて、各項目について説明、予備費については

2. 監査報告

筋内監査より、監査の結果、正確にして、適法なることを認め

3. 昭和五十三年予算案審議

議長の指名に基づいて、石田書記より別紙予算案について説明

年同様、本年度も新入生は入学時に四年間の会費を完納、従つ

て現在の三、四年生のみが会費を納入することになります。なお支出の部において「慶弔費」

4. 役員改選

会則第九条に役員任期は一年となつておりますので、改選せ

次のように発言があった。本年度は会長・副会長及び監査のうち

5. 新会長あいさつ

福田会長は会長の重職を引続いて引受ける器ではございません

一、閉会のことば

田中副会長より、会員皆様のご誠意溢るるご審議により、全議事を

皆様どうかお茶の会へお運び下さい。

英知大学後援会 昭和52年度決算書

Table with 3 columns: 項目, 金額, 備考. Rows include 入会金, 会費, 年会費, etc.

Table with 3 columns: 項目, 金額, 備考. Rows include 助成金, 事業費, 事務費, etc.

3. 差引残高無

昭和52年度 後援会助成金配分表

Table with 2 columns: 金額, 備考. Rows include 総額, 会則第4条第1項, etc.

英知大学後援会 昭和53年度予算書

Table with 3 columns: 項目, 金額, 備考. Rows include 入会金, 会費, 年会費, etc.

Table with 3 columns: 項目, 金額, 備考. Rows include 助成金, 事業費, 事務費, etc.

3. 差引残高無

書館見学の希望者が多く、その方々の一巡を待って茶話会を開く。

今日の集いは、半数以上が新入生の親達で、会長のあいさつや、学長の講演をきき、図書館の見学などによって、初めて知る英知大学に親しさを感じ心がなごむうちに、福田会長から自己紹介が始まり、和気あいあいのうちに順次ユーモラスな紹介が続く一層なごやかな雰囲気となり、そのうち一、二を拾ってみると、よい友達ができ大学へ行くのが楽しくて楽しくてたまらないとか学外オリエンテーションで先生も友達も親しくなり大学へ行くのが楽しくてもよいから書けというところで何でも分駆出しのことですけれども、何分駆出しのことで、まあ何の学識も持ち合せませんし、また気の利いた文章の書ける道理もありません。よってここでは思いつくままに「文学」(紙幅の関係上散文だけを上げることにします)についてとりとめのないことを少し書いてみたいと思います。

「棺を覆いて事定まる」という言葉がある。至言だと思えます。なげいきなりこんな成句を持出したかといえますと、最近の学生の卒業論文の表題を見るにボルヘスとかガルシア・マルケスとか比較的新しいところから実によく取上げられているからです。その主たる理由として六〇年代に起ったラテンアメリカ文学のい

「ぶんがく」偶感

後藤 昭 文 学 科 伊 斯 パ ニ ア 文 学



大学のチャペルでぜひ結婚式を挙げたいとか、こんなよい大学でありながら授業料が安すぎるとか、受験前に大学を見に来て、この大学に決めたというの、すばらしい大学であり、儲ける大学ではないことを直感したからである。など感想を述べられ、その中でも、この大学に学ばせてよかったという喜びの音が一番多かったことは大学の将来に対しよい影響を与えるものと思います。楽しいお茶の会もお話し合いがはずむうちに、一層お互の親しみを深めつつ午後五時半大盛会のうちに会を閉じる。(文責石田書記)

作品が翻訳されるに至りませんでした。それはそれで一向構わないのですが、ただ残念なことには一部の学生が安易にそれらの邦訳に飛びつく傾向が見られる。別に邦訳の有る無しにかかわらず、まだ生

「かけるうのようなもの」であると言った。そして文学を志す若者にもっと古いものを、古典作家を読むように説いたといわれます。別に文学を志さずとも学生時代の四年間というの一生を通じて最も自由な時間にあふれた時期なので、上記の「かけるうのようなもの」に走ることなく原本、それも古典と目される作品にじっくり取り組む姿勢に要求されるのではないのでしょうか。邦訳を読み流してひとりわかつた気になるよりは、原文に直接当たって自らの不明を思い知る方がはるかに健全だと考えるのですが。(これは学生を非難しているように見えてその実自分言いかせているのです)現代文学の話が出たついでに、一言付け加えますと、どうも近頃の小説はいやに冗漫なのが少くない。無論長くならざるを得ない然るべき理由があれば話は別ですが、実際は作家の自己満足に終っている場合が多いように思われます。先般亡くなった和田芳恵という作家は常々自らの文章作法を「綴方」ならぬ「削り方」であると述べていました。そして現在の創作の殆どは「牛の涎」のようにはだらだらとしまりがないと嘆いていました。「牛の涎」とは言い得て妙ですが、長たらしい小説でひとつのやされる当節これはこれでひとつの見識だと思えます。現実が複雑多様化して短編では思うことが充分に言い表わせないとはよくいわれることですが、しかし頭からそう決めてか

て始まる各段はホシなへて借書てすが、一見単純とも見えるその文章の背後に何とまあ深い意味が潜んでいることでしょう。実のところこの小説には微に入り細をうがったつもり凡庸な長編小説からはとても得られない奥行きが感じられるのです。思わず知らずしゃちこばってしまいました。何かというときぐ無くもがなの解釈を加えたがる性癖は我ながら余り感心しません。まず作品をそれとして過不足なく受け入れることが第一でしょう。ところでその作品ですが、上田秋成は『雨月物語』の序において自分がこれから語らんとするはなしは「鼓腹の閑話」であると一応卑下してみます。しかしよく考えてみますと、おおよそ「ぶんがく」なるものはいくら深刻ぶつたところで多かれ少なかれ先の「鼓腹の閑話」といった一面を持つていて、これは否定できません。加うるに文学にはもともと理屈では割切れないところがある。しばしば指摘されるように文学とは「ようなもの」であり、その意味で例えはハムレットという人物は実在するとも言えないし、かといって実在しないとも言えない。同様にサンチョ・パンサは「巴」だがドン・キホーテは「巴」でないとの見方も誤っている。かの太つちの従者は主人の騎士に劣らず「巴」な存在と云うべきでしょう。詰まるどころ文学とは普遍的な悟性よりもむしろ感性に訴えるものです。従って文学とは何かを定義する

てまじは正典を成るべく多く語るとから培われると信じます。尤も近頃の小説はくどくどしいとか言いながら、その非難している当人の文章が「牛の涎」では話になりません。古典を読むように、原典に接するようになりと自らを戒めながらこの辺で筆をおくことにします。

第十五回英知祭

去る十月三十一日から十一月三日までの四日間、『青春シンポジウム』What is tomorrow for?』という統一テーマのもとに第十五回英知祭が開催された。

今年の本学創立十五周年にもあたり、大学祭への意気込みも相当なもので、実行委員会を中心に一致団結して、マンネリ化打破に努め、今までは一新した英知祭となった。

おなじみの田吾作大行進を皮切り第一日目がスタート、夕暮れ迫るころには前夜祭のハイライト、ピアノ・パーティーが軽快な生演奏とともににぎやかに行われ、第二日目にはソフト・ボール大会、各文化クラブのステージ、フィリピンングカップル5名の映画、第三日目には沖繩招待旅行付ミス・英知コンテスト、花仲ロクコンサートが特設野外ステージにおいて行われた。最終日、十一月三日にはヨゼフ・ピタウ上智大文学長を招いて開学式典が行われ、祭日ともあって父兄、学生らが多数列席し十五周年にふさわしい式典となった。またこの日には、ハルタ・

マサコプロによるフラメンコ、野球部がくやし涙をのんだ教職員とのソフトボール大会、教授と学生とが膝を交えて真剣に話し合ったシンポジウム（「英知を考える会」）、のど自慢大会、ダンスパーティーなど、バラエティに富んだプログラムが組まれ、フィナーレは午後八時よりグラウンドにおいて行われたファイアーストームで赤々と燃え上がる炎の中、四日間の若人の祭典も燃えつきた。

なお十一月三日の開学記念式典は次のようなプログラムで行われた。

- 司会 教授 井上博嗣
- 演奏 教授 ジャン・J・メルロー
- 一、記念ミサ
- 司式 理事長 司教 安田久雄
- 共同司式 上智大学長 ヨゼフ・ピタウ
- 学 長 岸 英 司

共同祈願

創立記念日の祈り
全能・永遠なる神よ、私たちは、あなたが、み摂理によって、この地に英知大学を創立せしめたまい、ここに共に教え、学ぶ私たちを、たえずあなたの真理の輝きなる英知の光によって、照らし導いて下さいませことを感謝いたします。

私たちが、勉学・研究のつとめを通して、ますます深く真理の源なるあなたを知り、あなたの似姿に創られた、まことの人間の完成に向って進むことができますよう、あなたの英知と慈愛によって導き、力をとお与え下さい。

私たちの主イエズス・キリストによって。
アーメン

- 一、大学歌斉唱 一 同
- 一、挨拶 学長 岸 英 司
- 一、記念講演 上智大学長 ヨゼフ・ピタウ

「キリスト教と大学」



創立十五周年を祝して
第四回親睦記念パーティー
を盛大に行なう。

十一月三日、絶好の秋日和に恵まれ、文化の日の意義深い佳き日に、英知大学創立十五周年を迎え、午前十時より、大学主催の記念式典が、いとも厳肅なうちに進められ、はじめに、安田理事長司式による記念ミサが捧げられ、大学歌も声高らかに斉唱され、ついで岸学長の挨拶も終り、次に、極めて多忙な上智大学長ヨゼフ・ピタウ先生が本学のため、態々ご来臨を賜わり「キリスト教と大学」について、記念講演をいただき、力強いお言葉に、父兄達一同は感激して記念式典を終る。

正午より後援会主催の創立十五周年を祝して、「第四回親睦パーティー」を開く、記念パーティーは次の順序で開かれた。

- 1. 開会の挨拶 深井副会長
- 2. 会長挨拶 福田会長
- 3. 理事長挨拶 安田理事長

「キリスト教と大学をテーマに」

ヨゼフ・ピタウ学長講演

さる十一月三日、上智大学学長ヨゼフ・ピタウ教授は、午前十時より講堂において開かれた記念式典で、本学教授、父兄、学生たちを対象に「キリスト教と大学」と題する講演を行ない、多大の感銘を与えた。ピタウ学長は、まず上智大学と本学とが共通の建学の精神を有し、相互に深い関係のあることを指摘し、「ここに参りましても全然違和感が

ありません」と親近感を語った。「二つの大学は一つの大学と考えてもよいのです。上智大学の昔のパンフレットには「英知」という言葉がでてきているのです」と。両大学の親近性を述べたのち、講演の本論に入られる。講演の要旨は次の通りである。

キリスト教は外国の宗教であつて、日本に合わないものであると考へられがちであるが、実際はそうではない。キリスト教はアジアから起つた宗教である。キリスト教の説く一神教はアジアのものであつて古代ギリシアでは見られなかった。

キリスト教は、神以外のものは、一切相対的なものにしかならないと説く。この世のもので絶対的な価値を有するものは皆無である。ここから教育のために、第一の基本的な原則が生れる。それは、ものを判断する力、ものの価値を知る能力を養うべきであるということにほかならない。おもちゃが与えられなかったために自殺をした子供が東京にいたが、この子供にとっておもちゃは絶対的な価値を帯びるものであった。おもちゃやお金が絶対的なものであるかのように教えたのは親であり学校ではなかったか。ものの価値を知るといふことは、非難ではなくて、批評する力を養うことを意味する。子供達の心の中に入れてくるものを選択する力をつけさせることである。教職を志願している大学四年生

の学生は、「会社の命令があなたの良心の声と矛盾するときに、あなたはどうかするか」という問いが出されたことがある。団体や組織にとつても良いことであれば、個人にとつても同じことであるはずだ。自分自身の利益のために他者を圧迫することは絶対に許せないことである。自国の利益だけでも考えて行動すれば、その国はゆきづまってしまう。

次に、キリスト教の根本的な教えとして、すべてのものは未完成なものとして神から与えられたがゆえにこそ、それを完全なものに仕上げるよう努力することが私たちの責任である、ということである。従つて、教育においては、創造性を養わなくてはならない。教師は大いに学生に挑戦し、その可能性を伸ばすようにしなければならぬ。教師も、親も子供たちと一緒に成長してゆく必要がある。教育者は何よりもまず自分自身を教育する人でなくてはならない。ただ古いノートを開いて同じことをくり返すような教師は成長するはずがない。教師も学生も常によりよいものを作り上げてゆくべく、あらゆる種の不満感を持つていくことが望ましい。よりよい大学にしたい、今のままでは満足できない、という心が構えが大学の発展のために必要である。大学に入學してから四年間、何ひとつ挑戦しようとはしない学生は成長するはずがない。

キリスト教的な精神とはすなわち奉仕の精神である。今日の教育は多分に競争心を育て、私にとつて他人は無関係であるという気持ちを植えつけている。「大会社へ入社して安定した生活を送りたい」というだけのエゴイストには夢がない。このよ

うな青年はいつも自己中心的に振舞う。彼らは「自分がこの会社で何をしたいか」ということは全然考えない。「他人のために私は何かできるか」を考えてみる余裕がないのだ。かつての文部大臣であった永井道雄氏は「今、日本の青年のなかに無給で海外で働こうとする人がいないことがさびしい」と言われたことがあるが、こんなことでは我國の将来は暗いといわなければならぬ。他人のために奉仕する人、共同体的な雰囲気を作る人を育てる大学が大学の理想である。Universityとは一つの共同体的使命に向って助け合う *Adunum verum* であるはずではないだろうか。

それは一人の教師と一人の学生とのふれ合いから始まる。大学の研究室はいつも開放しであり、教師は二十四時間勤務であるべきである。「あなたは誰のためか」—このことが絶えず問われなくてはならない。キリスト教は決して西洋だけのものではなく、全人類のものであり、神はもとより全人類の父であり、私たちは人間として皆兄弟である。それゆえ、カトリック大学の特徴は国際性にある。自国の文化をよく理解するとともに、国際人を育てることが大切である。今日まで日本は外国から見習って必要なものを取り入れてまた私たちの製品を海外へ輸出していた。真の国際性とは他国の利益をも考慮するところにある。海外において、日本の市民の手によって現地の人々の利益のために建てられたものがあるだろうか。国連の統計によれば、成人文盲が八億人、栄養失調五億七千万人、通学していない児童

二億五千万人、年取一万七千円以下の者十三億人、適当な住宅を有さない者十億三千万人に及んでいる。この現状から一つの結論が生ずる。私たちだけが富んでいて、他の人々が死んでゆくのは許されるであろうか、ということである。

今や世界の北半球が豊かな世界、南半球は貧困の世界、というように二つに分れている。この二つの世界を一つにまとめ、境界線のない世界とすること、これが国際人たるもの使命であり、この使命を自覚させることがカトリック大学の役割りではなくてはならない。

英知大学における過去十五年にわたる発展は素晴らしい。この大学を世界のためにこそ益々良い大学にしていただきたいと思う。

以上、ピタウ学長は美しい日本語で延々一時間半にわたって語ったが、聴衆はひきこまれてゆくような思いで講演に耳を傾けていた。

ちなみに、ヨゼフ・ピタウ学長は一九二八年イタリアのサルディニアに七人兄弟の長男として誕生。十八歳でイエズス会に入会、二十四歳で来日。上智大学神学部で神学を学び、三十歳でカトリックの司祭に叙階。その後、ハーバード大学にてライシャワ教授のもとで国際政治学を学び、政治学博士の称号を獲得された。一九六三年一月、帰朝。翌年から上智大学法学部で政治学を担当。一九六八年四月に理事長に、一九七五年学長に選任されておられる。著書としては『ニッポンと日本人—見失われた心の再発見』（かんき出版）がある。

研究室内

○岸 英司教授（宗教学）は『世紀』十月号「特集—共同体—」に「宗教の本質としての共同体」と題する論文を発表した。

○興津憲作教授（イスパニア文学）は、イスパニア国外務省文化局、一九七八—七九年度文学言語学の給費留学生として去る九月二十五日、大阪空港を飛び立った。

興津教授は二十年前に一度留学の経験をもっておられるが、この度はご家族を残しての単身留学。マドリッド大学で開かれる講義を受けられる。一年間にわたる留学は「自分の足らずを補うため」といえば詩のような「に費される。「研究したこととは、まず授業に役立たせたい」とのこと。

「若い時は平気でしたが、今はスペイン料理の油っこさはどうも」といわれる興津教授。そろそろ日本食がなつかしい頃ではないだろうか。スペインからのお元気な第一便が待たれる今日この頃である。

○玉谷直実助教授（心理学）は『世紀』八月号に「若者の不信感」というテーマで論文を発表した。

教鞭をとるかたわら、カウンセラーとして活躍中の玉谷助教授は、最近の若者のカウンセリングを通じて彼らが大人に対する強度の対人不信感に陥っており、また自分の母親に対する不信感（不満感）を抱いているという現象を指摘し、実際の治療例をあげて、その背景にひそむ日本の社会的心理的現状と照らし合わせる。考察を加えている。

○和田幹男助教授（聖書神学）は今年の夏「福音宣教とは何か」というテーマで開かれた第二十四回上智大学夏期神学講習会で「旧約聖書における福音宣教」と題して講演を行った。

なお、この講習会の講話集は、エデルレ書店より出版され、只今発売中である。（定価三三〇〇円）

○前田総助助教授（フランス文学）はアルベール・マンニ作「塩の柱」にあるユダヤ人の青春」を翻訳、十月十日付で草思社より初版発行された。

○松本信愛講師（倫理神学）は岸学長の推薦により第三回「カトリック学術研究奨励賞」に「ジョゼフ・フレッチャーの状況倫理の批判的分析」というテーマの研究論文を応募、選考委員や専門家の厳密な審査の難関を経て、ふごと受賞の榮譽に浴した。

この賞はカトリックズムに基づいた研究の向上をはかるために、三年前から日本カトリック大学連盟によって設けられたもので第一回目の染田秀藤講師（イスパニア文学科）、昨年の西山俊彦教授（社会学）にひきつづき、本学では三人目の受賞である。

対象となった論文は、サピエンチア（英知大学論叢）第十二号（昭和五十三年二月発行）に掲載されているが、これは松本講師がローマ留学中の一九七五年代に研究され、全文英語で書かれたものを日本語になおし、約半分に簡略化したものである。

受賞に際して、松本講師は「とにかく賞と名のつくもの、賞らしい賞は生まれて初めての経験なので」と喜びをかくしきれない様子。「自分の勉強の新しい出発点としたい」と抱負を述べた。今後の研究への意欲と成果にかける期待は大きい。

なお松本講師には岸学長の手を通じて賞状および賞金十万円が授与された。

○宍 功講師（典礼学）「礼拝と音楽」十三号（日本基督教団出版）に「言葉を生かす音楽、グレゴリオ聖歌—わが国におけるカトリック教会の典礼と刷新と聖歌の課題—」と題する論文を発表した。

また十八号には、「カトリックの典礼音楽の歴史と現状—聖歌集変の遷をめぐって—」と題し、論文を発表した。この論文において宍講師は、日本のカトリック教会における音楽の歴史と現状をとらえるための最も適切な方法は「聖歌集」の歩みをたどることであると、明治初期から現代に至るまでを四期に分けて、各々の時期に編さんされた主な聖歌集について説明している。

英知通信

昭和五十三年十一月三十日発行

編集者 **英知大学**

発行者 **学長広報室**

兵庫県尼崎市若王寺苗田
一〇〇の一
電話(06)四九一—五〇八三
六六一